

追悼

岡田尚武氏を偲ぶ

西 弘嗣・高嶋礼詩



日本の地球科学の発展に大きな功績を残した岡田尚武氏（元会員）が2022年6月15日に逝去された。享年78歳であった。岡田氏は、1944年3月4日富山県に生まれ、1962年北海道大学に入学し、1966年3月北海道理学部地質学鉱物学を卒業、1968年3月同大学大学院理学研究科地質学鉱物学専攻修士課程、1971年3月同学大学院理学研究科地質学鉱物学専攻博士課程を修了して、理学博士の学位を取得した。その後、すぐに渡米して1971年3月からウッズホール海洋研究所のResearch Associate、1972年10月にはAssistant Scientistとなった。1年後の昭和48年10月には、米国コロンビア大学付属ラモント・ドーティ地質学研究所へ移籍してResearch Scientist、2年後にはResearch Associateとなり、米国を代表する2つの海洋研究所の職を経験した。4年間に及ぶ海外研究員を経て帰国し、1976年11月に山形大学理学部地球科学教室に助教授として赴任した。当時、山形大学では地球科学関連の学科構想があり、その中心となって開設に尽力し、斎藤常正名誉会員（故人）や原田憲一氏など、海外で活躍していた研究者を招致して新しい学科を創設した。当時の山形大学では、地震学、岩石学、鉱床学、地球化学などの分野がそろっており、日本の地球科学を牽引できる組織となった。

その後、1988年4月に山形大学教授へと昇任し、1995

年4月には北海道大学大学院理学研究科へ教授として赴任した。北海道大学でも持ち前のリーダーシップを発揮し、同大学の評議員、理学研究院長・理学院長・理学部長などの重要な役職を歴任した。さらに、2003年には、21世紀COEプログラム「新・自然史科学創成」、2008年には北大基礎融合科学領域リーダー育成システムを主導し、様々な専門分野の横断的な共同研究の活性化と、多くの若手に対する研究職への就職機会の創出に尽力し、北海道大学の重要なプロジェクトの中心には常に岡田氏の活躍があった。このとき岡田氏の主導した組織改革は、北海道大学の教育・人材育成だけでなく、全国の大学改革などにも大きく波及した。2007年3月31日、定年により北海道大学を退職されたが、その後も引き続き4年間、北海道大学理事・副学長に就任し、2011年3月末まで北海道大学の運営に大きく貢献した。

研究面では、岡田氏はナノ化石の世界的な権威として層序学・微古生物・古海洋の分野で顕著な業績をあげた。1960年から1970年代は、深海掘削計画が開始され、有孔虫やナノ化石などの微化石は海底コアの年代を決めるのにきわめて重要であった。当時は、欧州の研究者が設定したNPとNNの化石帯が提唱されていたが、岡田氏はこれを改訂したより高解像度の世界基準の生層序を提唱し、古第三系を19帯、新第三系を15帯に区分し、CPとCNのコードをつけた化石帯を提案した。この化石帯はNN/NP帯とともに世界中の海洋コアや地層に適用され、世界中の地層や海底コアの年代を決めたといつて過言ではない。さらに、従来年代が不確定であった日本の地層にも使用され、九州の古第三系や北海道の地層の正確な年代が明らかとなって日本列島の地史を改変する原動力にもなった。この成果は高く評価され、1993年4月日本地質学会論文賞が授与された。

もう一つの大きな成果は、世界で初めて現在の太平洋で生きている円石藻の分布を深度50mごとに区切って明らかにしたことである。この研究により、海流、水温、塩分濃度など、海洋の環境を円石藻の分布から復元することができるようになり、古海洋学や古環境学の発展に重要な貢献となった。この研究は現在も多くの文献で引用されており、海洋研究にとって最も重要な成果の一つとされている。これら一連の成果に対しては、1988年には日本古生物学会学術賞が授与された。

我々にとってもっとも想い出があるのは、岡田氏の主導により1999年から2005年の期間に行ったフランスの海洋無酸素事象に関するプロジェクトである。この研究では、多くの若い研究者や大学院生が南フランスで欧米の標準となっているテチス海の地層を調査することができ、日本などアジアとの違いを実体験することで、その後の研究に大きな影響を与えることになった。さらに、岡田氏は若手が自由に研究する機会と研究費を惜しみなく提

供し、このプロジェクトに関わった研究者は現在も多方面で活躍している。

岡田氏は、4年間の海外経験から英語が堪能で、国際情勢にも明るく、諸外国に多くの友人があり、高い国際性をもつ研究者として評価されていた。海外の事情に詳しいこともあり、海外の研究者に対しても対等な議論ができ、日本の主張を堂々とするところのできる数少ない研究者であった。そのため、岡田氏は、研究活動と共に学内外の委員も多数歴任し、日本の地球科学の発展に大きく尽力した。特に、1960年に開始された深海掘削計画(DSDP)に協力し、4つの航海に参加し、船上で次々とコアの年代を明らかにした。後続の深海掘削国際計画(IPOD, ODP)においてもその豊富な経験から国内研究連絡委員、パネル委員、研究計画委員会委員などを歴任し、2013年に統合深海掘削計画(IODP)が開始されてからは、国内連絡員副委員長、国内科学掘削推進委員会委員、IODP-MI(中央管理機構)理事会議長および副議長など重要な役割を果たし、文字通り深海掘削計画を推進する国際的な首脳陣として活躍した。この他、海洋開発機構、文部科学省科学技術・学術審議会、日本学術振興会などの各種委員を歴任し、日本学術会議でも学術

委員を務め、日本の学術振興をリードした。学会運営でも日本古生物学会評議員、同長期計画委員、日本地質学会支部長など枚挙にいとまがない。これらの貢献が高く評価され、2016年に日本地球惑星科学連合Fellowとなった。

一方、岡田氏は、個人としては自然をこよなく愛する人であった。若い頃から山登りが好きで、定年後も山登りを続けていた。さらに、野草が大好きで、山形大学在任中から山野の花の写真を撮り続け、膨大なデータを整理して自分でデータベースを作って公開していたほどである。その写真集は、図鑑といえるような見事な出来映えで、ナノ化石の研究よりも傾けた情熱が高いのではないかと疑わせるほどであった。山菜にも造詣が深く、山形大学在任中には部外秘の山菜マップを作成し、野外実習のときには露頭よりも山菜の解説の方が詳しいくらいであった。岡田氏の地球科学への貢献よりも、このような自然の中で楽しんでいた姿の方が、われわれの心の中にはとても強く残っている。この度の突然の訃報はとても残念でなりません。生前の多大なる偉業に感謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

